神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	「三匹獅子舞」研究の現状と課題
著者	鈴木通大
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 34 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2008 年（平成 20 年）3 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【論文】

「三匹獅子舞」研究の現状と課題

鈴木通大

【要旨】

神楽や正月の門付けに登場する獅子舞（伎楽系）は、人口に膾炙した民俗芸能であるが、「三匹獅子舞」といわれる一人立の獅子舞（風流系）になると一般の人にはほとんど知られていないのが実情であろう。しかし、この三匹獅子舞は、現在、愛川町、相模原市、横浜市および川崎市域の一〇ヶ所で演じられており、その分布は鹿踊りの岩手県を除き、北海道南部から関東甲信越地方までの東日本に広くみられるが、西日本でも例外として福井県小浜市、静岡県掛川市、愛媛県宇和島市の三ヶ所にみることができる。

ここでは、こうした三匹獅子舞に照射し、そこに派生する諸問題について再検証することにある。そこで、三匹獅子舞に関する先行研究を回顧し、同時に神奈川県域や県外の事例群を踏まえて、三匹獅子舞の名称、目的、獅子頭の形態、発生と展開、描かれた三匹獅子舞図、由来・霊験譚、芸態と演舞構成、伝承母体と保存会、という八つの課題に整理し、若干の考察を試みる。

【キーワード】　風流　三匹獅子舞　獅子頭　ササラ　農耕儀礼

はじめに〜三匹獅子舞とは〜

獅子舞は、神楽とならんで全国各地に伝承されている民俗芸能のひとつで、人口に膾炙している。獅子舞の歴史は古く、その起源は外来の芸能にあるといわれ、『日本書記』によると、推古天皇二十年（六一二）、帰化した百済人の味摩之が呉の国で学んだ伎楽舞を伝えたのが伎楽の始まりで、そのなかにいわゆる獅子舞が登場しているからである。伎楽は腰鼓、笛、銅筅子に合わせて繰り広げられる仮面劇で、後頭部に大きな仮面を被り、行列を作って種々の伎楽を演じた。そのなかで獅子（師子）は先導役の治道の後に師子児に手綱をとられて登場し、舞ったといわれる。舞の内容については不明であるが、その役割は伎楽行列の先頭に立って悪魔払いを担ったといわれ、このことは、現代でもなお祭礼行列の先頭に立つ行道獅子として継承されている。

わが国の獅子は、ライオンの象徴化した獅子として大陸から伝来したもので、古来より悪魔を祓い、幸福を招く霊獣として親しまれてきたと考えられてきている。この獅子を頭に付けて舞う獅子舞であり、そのひとつに二人立の獅子舞と称して、ふたり（複数）の人が胴衣（幌状の胴幕）のなかに入り、獅子の姿をつくるが、民俗芸能の分野ではこの獅子舞を「伎楽・舞楽系獅子舞」とか、「二人立獅子舞」とも称している。

もうひとつはこれらとは別に、一人の踊り手が一頭の獅子に扮し、三頭以上が一組になって構成する一人立の獅子舞であり、これを〈一人立三頭獅子舞〉とか〈三匹獅子舞〉などと称している。

この三匹獅子舞は頭に獅子や龍、鹿、猪、麒麟などの頭（かしら）をいただき、腹に付けた太鼓・羯鼓を打ちながら踊る。こうした獅子舞は、「風流系獅子舞」とも称され、神奈川県を南限とし、関東・東北地方の東日本に広く分布し、西日本にはほとんどみることができない。

しかし、例外的ではあるが、川越藩の酒井氏が若狭小浜（現福井県小浜市）に国替えになったとき、三匹獅子舞の演者を連れていったために伝承された雲浜獅子と、伊達政宗の庶長子秀宗が伊予宇和島に領地が与えられ際に、仙台より連れていった八ツ鹿踊りなどに三匹獅子舞がみられる。

こうした「三匹獅子舞」は、文献や絵画などに、顕著に登場するのが江戸時代であることから、その発祥はおそらく江戸時代初期であると考えられている。本稿では、この「三匹獅子舞」[1]について研究史、分布、諸相の角度から、今後の研究上で重要なポイントとなるべき課題について取り上げ、あわせて若干の民俗学的考察することにある。

なお、ここではいわゆる三匹獅子舞の名称が近年一般的に理解されつつあるが、最近の研究動向を回顧すると、必ずしも研究者のあいだではかならずしも理解された概念とはいえないが、本稿ではこうした点を踏まえ、「三匹獅子舞」（以下、三匹獅子舞と表記）の名称を用いることにした。

一、三匹獅子舞の研究史

三匹獅子舞の研究論文や調査報告に関しては、大村達郎の「三匹獅子舞主要研究論文目録」〔大村、一九九七〕、またその分布状況については笹原亮二の「三匹獅子舞の分布」〔笹原、二〇〇一〕によって、その先行研究や三匹獅子舞の全貌を把握することが可能である。ここでは、三匹獅子舞の先行研究の足跡を辿るとともに、三匹獅子舞の事例を通して、三匹獅子舞の研究がいつ頃からはじまり、どのように展開してきたのか、そこにはどのような問題点を内在しているのかを整理することである。そのことは、同時に、三匹獅子舞という名称がいつ頃から使われるようになったかを遡及して捉えてみたい。

三匹獅子舞研究の嚆矢は、一九三〇年に刊行された『民俗藝術』第三巻一号（獅子舞特集号）といっても過言ではないだろう。[2]ここには、「相模高座郡大島の獅子舞」、「武蔵川越の餝獅子舞」、「武蔵血洗島諏訪神社獅子舞」、「岩代安達郡小濱町の獅子舞」など、各地の三匹獅子舞の報告をはじめ、獅子舞の論文も掲載されている。当時の論文や報告には、まだ「三匹獅子舞」という名称が使われていないが、明らかに今日でいう三匹獅子舞の事例が具体的に報告されている。

柳田國男も、獅子舞にも関心があったらしく、諸国の獅子舞の作法を比較して、つぎのように述べている。

例へば獅子舞が悪魔を攘うと称して、疫病流行の際などに村中を巡ること、是も獅子だから、こは（ママ）いからと、今では手軽に考へられて居るやうだが、それは所謂大法會の獅子などの本来の目的では無かつた。伎藝に携はる者の地位系統、乃至は信仰上の條件などにも、佛法からは解説の出来ないものがあつた。村々のシシは通例三頭の

連れ舞ひであつて、中ジシの役は重要であった。牝牡相慕ふの状を演ずる迄は石橋なども同じであるが、歌の章句には往々にして、嶺の秋霧に妻を隠されて、恋ひ求めて得なかつたといふ悲しみが叙べてある。即ち大昔の牲祭の式伴うたかと思ふ清哀の調が、尚幽かながら傳はつて居るのである」〔柳田、一九三〇、二四三～四〕

長い引用になってしまったが、獅子舞には今日でいう一人立（風流系）と二人立（伎楽系）の二系統があることを指摘し、前者の獅子舞には生贄したシシ（鹿）を供養した残存を示唆し、踊りの起源を鹿の供養に求めている。こうした考えは、最近、発表した小島美子の論文のなかにもみることができる

本田安次は「此の地で所謂獅子舞といふのは、太郎獅子、次郎獅子、雌（メン）獅子の三匹の猪（シシ）頭のものが出て舞ふもので、同じく此の地方に演ぜられてゐるお神楽若く太神楽とのみ呼ばれてゐる、一つの獅子頭の中に二人若しくは、二人以上入つて舞はすものとは区別されてゐる」〔本田、一九三〇、一五八〕と指摘し、さらに中山太郎はこの点に踏み込んで、「我が固有の鹿舞に支那の獅子舞が附會習合された事は、柳田先生の説かれた如くであるが、さて鹿舞と獅子舞の区別を角の有無で判定するよりは、一人獅子（続に立ち獅子と云ひ、一人にて獅子頭を被るもの）と、二人獅子（頭と尾とに一人づつ二人入るもの）によつて、区別したならば如何なものかと思われる」と言及している〔中山、一九三〇、二〇九〕。ここには、明らかに三匹獅子舞の存在が確認されているが、まだ名称として用いられていない。

古野清人は一九三六年から一九六九年までのおよそ三〇年間にわたって、三匹獅子舞の実証的研究に取り組んでいる。また、各地の三匹獅子舞について事前にアンケート調査を実施し、その分布状況を把握したことである。こうして得た調査結果をもとに、古野は大きく「獅子舞の起源」、「獅子舞の分布」、「三匹獅子舞の特徴」、そして、「資料編」の四分野について論究し、さらに興味深いことに、「三匹獅子舞は、集落の農耕儀礼に主要な一役を演ずる。これは部落の共有物であり、よくいわれているように、神社に専属するものではない。村の神社の祭礼のために獅子が神社にも参拝するとみるべきであろう」〔古野、一九六八、五〕と指摘している点にある。

また、古野はこの獅子舞は里神楽の獅子のように職業的な出稼ぎをしないし、その生活空間はあくまでも部落内に限り、しかも農耕儀礼として重要な役割を演じ、五穀豊穣、村内安全を祈願するよりも、具体的に雨乞い、風祭り、などの特定の目的のため霊験をあらたかにしようと努めている点を明らかにした。このことは古野自身がこの三匹獅子舞を独自な民俗芸能として捉えるだけはなく、むしろ村の一部落がなぜこれらの獅子頭を独力で担いで舞い踊り狂うかに関心があったからだと述懐している〔古野、一九六八〕。すなわち、古野は早い時期から三匹獅子舞は職業化している里神楽にみられる獅子舞などに対して、ムラ単位の行事であることを指摘していることである。

これ以外にも、三匹獅子舞について雄獅子二匹と雌獅子一匹を基本としながらも、その組み合わせによって、二類型に分けている。ひとつは雄獅子二頭と雌獅子一頭のタイプと、もうひとつは親子獅子

（父・母・子）のタイプである。ところで、古野は「三つ獅子舞」をはじめ、「三匹獅子舞」「三匹獅子」「三つ頭獅子舞」などという名称すなわち、三匹獅子舞について早い時期から、用いていることである。

三隅治雄は『日本民俗学大系　第九巻』に執筆した「風流」という一文のなかで、「三頭でするのを三匹獅子といい、雌獅子隠しといって二匹の雄獅子が雌獅子を争うような所作を跳躍しながら演ずる」〔三隅、一九五八、一四二〕と解説し、その動作は二人立ち獅子舞に比較して念仏踊りの要素が強く、腹に太鼓・羯鼓をかけ、それを打ちながら踊るので、獅子頭がさえ除くと、西日本各地の念仏系の踊りと等しいという。しかも、シャグマを被ったり、笠を被ったりするのを、獅子頭でしているのが違いである〔三隅、一九五八〕と指摘している。

飯塚　好は、三匹獅子舞を「一人立三頭の獅子舞」として捉え、獅子舞のおこなわれる日、その目的、儀礼的要素、舞の構造、地域性について考察している〔飯塚、一九八四〕。

山路興造は、三匹獅子舞が成立する過程を歴史的に考察する論考を発表している〔山路、一九八六〕。最初に、民俗芸能研究の先駆者である本田安次が獅子舞を形態的観点から二人立（大陸系の獅子舞、伎楽・舞楽系）と一人立（わが国固有の獅子舞、風流系）に区別し、それぞれを別系統に分類していること〔本田、一九五二〕を踏まえて、「一人立ちの風流系獅子舞で、多く三頭を一組にして登場するために、三匹獅子舞の名で呼ばれている。二人立ちの獅子舞が、獅子頭を手で持って操作し、頭の後に付けた母衣の中に、二人以上の人間が入って舞うの対し、一人立ちの獅子舞は、頭上に小型の獅子頭を固定し、胸に鞨鼓や、小型の太鼓を付けて踊るところに特色がある」〔山路、一九八六、五〇〕と三匹獅子舞を定義している。

さらに、「胸に鞨鼓（太鼓）を付けた三匹獅子舞は、風流踊りにおける中踊りの趣向の一種が独立したものであり、その四隅を囲んでスリササラを摺る花笠の者は、側踊りの人数が、四隅四人と最小限に縮小されたものであると考えられる」〔山路、一九八六、五五〕としている。

また、三匹獅子舞の成立については、「浮流踊の縮小化した型の三匹獅子舞は、江戸幕府成立前後（十六世紀末～十七世紀初頭）に、江戸を中心とした地域に現れ、以後徐々に各地へ伝播したのではないか」〔山路、一九八六、六一〕と推測している。現在でも、この説は支持されているといってもよいだろうが、最近、小島美子によって反論が出されている。

千葉県松戸市立博物館では、三匹獅子舞に関してきわめてユニークな調査研究報告書を発表している。同書は、調査員がさまざまな問題意識のもとに綿密な調査をおこない、現在の状況や伝承の実態に対して緻密な分析を施している。

すなわち、市内の和名ヶ谷、上本郷、大橋の三地区でおこなわれている三匹獅子舞について、調査時現在の観察と記述を基軸とした調査報告書になっている〔松戸市立博物館、一九九四〕。従来の報告書に見られるような写真・図解等を挿入による芸態の記述がほとんどなく、その部分は制作したＶＴＲに委ねられ、研究者の視座から捉えた論考が各論として集大成している。(3)

近年、三匹獅子舞を精力的に調査研究している笹原亮二は、一九九一年から一九九六年の間に相模原市域、愛川町で演じられている三匹獅子舞の詳細な民俗調査を実施し、三匹獅子舞の緻密なモノグラフを作成している。[4] さらにそれらの成果をふまえて、論文「三匹獅子舞の分布」〔笹原、二〇〇一〕、および著書『三匹獅子舞の研究』〔笹原、二〇〇三〕として体系的にまとめている。

笹原は、民俗芸能の調査研究において現地で資料批判的に「見る」こと、そして過去の様相や由来、系譜をうかがい知るために「聞く」ことの意義を踏まえ、民俗誌的研究に根ざした調査研究の成果である。三匹獅子舞の芸態の比較から芸態の特徴を抽出、歌が演舞のなかで果たす役割、三匹獅子舞の由来や過去の様相について文字で記された記録類や口頭伝承の依存状況の検討、使用される獅子頭をはじめとした用具類の管理・修理・新調の実際に関して、伝承と現在、という観点から複合的分析を試み、しかも「変化」に留意して三匹獅子舞の様相を明らかにしている〔笹原、二〇〇三〕。古野と並んで、綿密なフィールドワークを基本に三匹獅子舞を総合的にまとめているといえよう。

最近では、小島美子が興味深い発表し、それによれば、「芸能史上のさまざまな芸能がすべて西日本から発展してきたわけではなく、さまざまな要因によって各地で始まり発展することを、文献資料には現れないという理由で簡単に無視してはいけないと思う。文献資料はたまたま記録される条件があった時に記録されているだけであって、歴史学でもそうだが、とくに民俗芸能や民俗音楽の場合はむしろ記録されていない状況をどう読み解くか、その課題と方法に大きな問題があると思う」〔小島、二〇〇七、一一一〕という立場から明快に論じている。

そのひとつは、伎楽・舞楽系の獅子舞（二人立ち）に対する三匹獅子舞という風流系の獅子舞（一人立ち）を、三匹「獅子舞」ではなく、三匹「シシ踊り」とした点にある〔同、一一五〕。もうひとつは、「関東地方を中心に新潟や福島などにも広がっている三匹シシ舞は主にイノシシを、岩手県を中心にも広がっているシシ踊りはカノシシ、つまりシカを狩りして食べなければならなかった人びとが、それらの霊を弔い慰めるために始めた芸能である」〔同、一一二〕と考え、「イノシシの全国分布図」と関連させて、「三匹シシ舞はやはり本来、イノシシなどの霊を慰め供養し、自然の恵みに感謝し、次の豊猟を願うということが目的で始まったと考えるべきだということがわかる」〔同、一一五〕と結論づけていることにある。

もうひとつは、小島は関東地方とその周辺の三匹獅子舞で用いる太鼓に注目し、その締め太鼓が「枠なし型」と「枠付き型」の二種類があり、その分布も東に枠なし型、西には枠付き型があり、東京都内および都下とその周辺のごく一部がまた枠なし型になっている〔小島、一九七七、一一五～六〕と指摘している。

一方、中村茂子も興味深い発表をしている。それによると、佐渡島に伝承している小ジシ舞を事例として、三匹獅子舞という名称、佐渡市八ヶ所に伝承されている「小ジシ舞」のシシ頭が鹿頭であることの意味、風流系シシ踊りにみる中踊りの関係、という三点から風流踊り

と三頭シシ踊りの接点について論究し（中村、二〇〇七）、そのように区別することによって神楽系の「獅子舞」と混同しないで済むという点を重視して、従来の三匹獅子舞を「三頭シシ踊り」と呼ぶことを発案している。

菊池和博は、中村も指摘していたように東北地方を中心に分布している三匹獅子舞を「獅子踊」として捉えている。そうした獅子踊の中で供養と結びついているような庄内地方の獅子踊に注目し、その先祖供養と亡者供養の役割を考察している〔菊池、一九九八〕。

田村　勇は、千葉県富山町に鎮座する福満寺に所蔵されていた『富山祭礼降雫番組』すなわち寛政元年（一七八九）から明治二十九年（一八九六）までのやく一〇〇年間に三匹獅子舞を富山に奉納した住民の記録を手がりに三匹獅子舞の廃絶過程について、住民の信仰と宗教者との関わりから考察している〔田村、二〇〇四〕。

そのほかにも、畠山豊は、三匹獅子舞研究を俯瞰し、その成立と展開について考察し、来由書の検討などを指摘している。また、現在までにわかっている近世期の三匹獅子舞に使用された獅子頭および伎楽・舞楽系獅子頭の編年について紀年銘を手がかりにまとめている〔畠山、二〇〇五〕。大村は、悪病除けの行事や儀礼を手がかりに、三匹獅子舞と関係から、三匹獅子舞の性格やその変容について考察したもの〔大村、二〇〇〇〕、獅子頭の形態分類について論究したもの〔山本、一九八六〕などがある。

いずれにしても、三匹獅子舞の研究は一九三〇年代のその存在が注目されてから、一部の研究者の手によって研究成果をあげてきている[5]が、かならずしも三匹獅子舞の全貌が明らかになったわけではない。その主なる事由は、この民俗芸能が東日本に分布しているだけとはいえ、その諸相があまりにも複雑なので、その実態を精確に把握することはむずかしい背景もあるだろう。また、三匹獅子舞には民俗芸能の分野だけではなく、民俗学の分野からも取り組まなければならない課題を多く内包しており、同時に多くの問題点が山積しているといえよう。だからこそ、三匹獅子舞は、民俗芸能や民俗学などにとって、研究対象の宝庫ともいえよう。

二、三匹獅子舞の諸相と分布

（一）三匹獅子舞の諸相

1. 神奈川県域における三匹獅子舞の諸相

神奈川県域で演じられている「三匹獅子舞」は、平成二〇年一月現在、愛甲郡愛川町三増、相模原市大島・下九沢・田名・津久井町鳥屋（旧津久井郡津久井町）、川崎市多摩区菅・宮前区初山・幸区小向、横浜市青葉区鉄・牛込（現あざみ野）の一〇か所（「神奈川県下の三匹獅子舞分布図」を参照）であり、そのうち田名を除いた九か所でおこなわれる三匹獅子舞は神奈川県の無形民俗文化財に指定されている。では、県域における三匹獅子舞の様相をみてみよう。

「三増の獅子舞」の場合、三匹獅子舞の頭が巻獅子（父）、玉獅子（母）、剣獅子（子）の三つで、いずれも赤塗である。三匹獅子舞は諏訪神社に合祀された八坂神社の天王祭の時期に踊る。諏訪神社は文暦

二年（一二三五）の創建といわれ、別当寺である清徳寺の開基はさらに古い応徳元年（一〇八四）であり、その二十二世慶寛法印の刻銘が、バンバ面の裏にみえる。慶寛の没年が享保十二年（一七二七）であるから、この三匹獅子舞もその頃始まったと考えられている。

獅子舞の一行が上宿の当屋（倉ともいう）で支度をし、そこから諏訪神社まで道行をおこなう。境内の四隅に忌竹をめぐらした舞場で踊ってから、下宿の当屋に帰る。翌年は、下宿から出発して上宿に帰るという年次交替制でおこなわれている。

道行は左手に籠、あるいは団扇、右手にシデのついた榊の枝を持った天狗が先頭に立ち、次いで籠を持った花笠の少年二名、月日の旗二名、バンバ面一名、獅子舞三名、笛数名、歌上げ数名の順序である。バンバ面を付けた者はもどき役で、踊りの調子を盛り上げる役割を担っているという。獅子舞の演者は腹に付けた太鼓を打ちながら、笛と唄に合わせながら踊る。

古来、この獅子舞は門外不出といわれ、神社を中心に一町（約一〇八メートル）以外は出さないという掟があった。三増の獅子舞は、田名の獅子舞と同系統の角兵衛流一人立獅子舞といわれ、歌の数も内容も同じである。角兵衛流一人立獅子舞とは、越後獅子ともいわれ、新潟県西蒲原郡あたりに伝わる一人立の風流獅子舞である。(6)

「大島の獅子舞」の場合は、諏訪明神神社の境内で演じられ、後述の下九沢と同系統の角兵衛流一人立獅子舞である。獅子頭は剣獅子（雄）、巻獅子（子）、玉獅子（雌）の三つで、赤塗りである。また、腹の太鼓には黒縁の胴に三つ巴が描かれている。

稽古場に集まった獅子連は、花万灯二本を先頭にヒョットコ面を付け、左手に八ッ手形の天狗団扇、右手には青竹のササラ（籠）を持った岡崎、籠を持った天狗、両手に榊を持った鬼、三匹の獅子、古老の役である笛役五人、歌上げ五人、最後に世話人と続き、諏訪神社まで道行をおこなう。舞場は社殿の前で、盛り砂が敷かれた土俵、四方に忌竹をめぐらし、その傍らに万灯が二本立っている。最初に、天狗が忌竹に張られた注連縄を切って、中に入る。獅子舞は諏訪明神神社境内の土俵で、三匹の獅子に鬼が加わって踊られる。岡崎は踊りに加わらず、籠を股間に立てて擦りながら踊り場まわる。概して足を左右に振る所作が多く、飛び上がるのは一度だけである。獅子頭は剣獅子、玉獅子、巻獅子の三頭で、いずれも赤塗である。剣獅子の内側に「文政十二年（一八二九）社掌円明院第十二世桃源院修理」という銘があり、このことから大島の獅子舞は文政年間以前から始まったと考えられている。当地にも『日本獅子舞来由』の巻物があるが、奥書部分の記載を欠くので、伝来の年号は不明である。近年、獅子頭を新調し、『日本獅子舞来由』の複製を作製している。(7)

「下九沢の獅子舞」の場合は、御嶽神社の境内でおこなわれる。獅子頭は、玉獅子（雄）、剣獅子（雌）、巻獅子（子）の三つで、いずれも赤塗である。大島地区の三匹獅子舞と同型で、角兵衛流一人立獅子舞に属すると考えられている。

獅子が三名、天狗面を被った岡崎（ヒョットコに類する道化で手に

笹をもつ）一名が付く。続いて花笠を被った箙を持った子どもが二名、幟・団扇万灯花笠を持った役、古老がつとめる笛・歌上げの役が数名、世話四名役がつく。獅子役の少年は氏子の長男で両親の揃った者に限られていた。最初に、岡崎が社殿の盛り砂をして、忌竹で囲った舞場で、盛り砂を足でならして土俵をつくる。踊りの特徴として、首を左右に振る所作の多いことや腰を落とさないことなどがあげられる。また、三匹獅子の踊りがつねに一列あるいは三角形をつくっている。

この下九沢地区には獅子舞の由緒を記した『日本獅子舞来由』（写本）が伝存する。これによると当地の獅子舞は、文政四年（一八二一）に西多摩方面から伝来した角兵衛流一人立獅子舞であることがわかる。『日本獅子舞来由』は、獅子舞の伝承や上演との関わりを記したもので、地区で保持されてきたものである。このような由緒書が伝来している場所は少なく、県内では相模原市下九沢と同大島のみである。また、下九沢の三匹獅子舞は明治三十七、八年頃から中絶していたが、昭和三年に復活している。(8)

「田名の獅子舞」の場合は、巻獅子（父）、玉獅子（母）、剣獅子（子）の獅子頭を使う。田名八幡宮の境内でおこなわれる。明治・大正時代は中絶していたものの昭和四九年（一九七四）に同地の中学生を踊り手にして復活した。田名の獅子舞は、下九沢や大島と同じ形式の獅子舞であるといわれる。

バンバ（姥面）一名、笛四名、太鼓三名、花笠二名、万灯二名で構成される。獅子舞は、腹に付けた太鼓を打ちながら笛や唄に合わせて踊る。この他、バンバ役と天狗が登場する。獅子の頭は龍頭形タイプである。(9)

「鳥屋の獅子舞」の場合は、三匹獅子舞が八月二十二日の諏訪神社の祭礼におこなわれる。同社の鍵取り寺は天台宗清真寺といい、正治二年（一二〇〇）の開基といわれ、明治初期の神仏分離後、獅子舞の主管が清真寺から諏訪神社になったという。この寺の一〇世住職であった円海法印によって、鳥屋の三匹獅子舞は八王子市高槻（高月）から移入されたといわれている。また、一方で信州から伝えられたともいわれている。

獅子はそれぞれ父（雄獅子・巻獅子）、母（雌獅子・玉獅子）、子（子獅子）といわれる獅子頭を被った三匹の獅子が踊る。踊り手は白衣、パッチ（股引）、手甲という服装で、雄獅子と子獅子が腹に太鼓を付け、両手に撥を持っている。雌獅子は太鼓を付けないで、その代わりに箙を持っている。獅子役三名の他に、箙役といわれる十歳くらいの箙を持った子供が三名、笛役が二人、歌役が数人付く。この歌役は古老が務めるという。

清真寺の檀家が多かった中開戸地区と隣りの渡戸地区がオヒマチ（日待）をしていた関係で、中開戸から二名、渡戸から一名を出して三匹獅子舞を構成するようになっている。祭りの当日、中開戸の鈴木家の座敷に世話人、踊り手など全員が集まり、当家の庭先から諏訪神社へ練って行く。

神社に着くと、忌み竹に囲まれた舞場に父、母、子という順序で横

一列に並んでから、踊りが始まる。踊り手は、腰を曲げないで、背筋を伸ばし、立ったままの状態で踊る。動作は単純で、首を左右に振り、お辞儀をしたような前屈みの姿勢で、同じような動作を繰り返す。太鼓を打つ際、左右の撥で交互に打っていたが、以前は、千葉県安房地方の鞨鼓踊り（三匹獅子舞）でみられるように、正しい打法といわれている同時打ちをしていたという。

獅子舞に用いられる獅子頭は、扁平で「重箱獅子」の愛称があり、竜頭形の頭である。巻獅子（牡獅子）は父獅子、爺さん獅子とも、玉獅子（牝獅子）は母獅子、婆さん獅子とも、剣獅子は子獅子ともいわれ、いずれも赤塗である。獅子頭には、鶏の羽毛が付いている。昔はどこの家でも鶏を飼っていたため、毎年、新しい羽毛を用いた。また、雄獅子の下顎の裏側には「円海」の陰刻銘がある。円海は実在の人物であったらしく、延宝六年（一六七八）一一月一四日に没し、その墓が八王子市高槻の円通寺にある。本県域への伝来は、彼の没年から逆算して寛文・延宝年間（一六六一～一六八一）とされる。これが事実であるならば、神奈川県域では最古の三匹獅子舞といえよう。

この獅子舞は雨乞いを祈願しておこなわれたもので、かつては踊り手がムラの長男に限られていたといわれる。(10)

「菅の獅子舞」の場合は、獅子頭が剣獅子（雄）、玉獅子（雌）、巻獅子（子）の三つで、いずれも赤塗である。大獅子、牝獅子、久獅子ともいう。三匹獅子舞は、毎年九月十二日、薬師堂の土俵場でおこなわれる。

獅子役三名、幣負いともいわれ、右手に団扇、左手に五色の房を付けた瓢箪を持った天狗、笛役五名、歌上げが数名で、この役は古老があたっている。

古くは頭屋に集まって、そこからムラを練り歩いて薬師堂に向かった。現在も旧頭屋の庭で踊ってから薬師堂へ向かう。舞場と呼ばれる、四本柱の土俵には新しい砂が敷いてあり、天狗が最初に注連縄を切ってから、土俵上で踊る。天狗が加わって、四人立舞の形態をとる振りが多い。また、幣負いが獅子を相手に賽子を振って賭博をおこなう珍しい場面がみられる。この獅子舞は、『江戸名所図会』（天保七年刊）にも「毎歳八月十二日、獅子舞ならびに弓を横えて踊る事あり」という記載がある。(11)

「初山の獅子舞」の場合は、獅子舞には赤い襷を付け、大団扇を持った天狗が付く。行列には花笠を背負った金棒引きの二人が先頭を切る。笛役六人、歌上げは数人で、古老があたる。獅子が腰を落として低く踊ることや、牝獅子を隠し、列を離れて片膝をつきながら太鼓を打つさまに特徴がみられる。土俵内で踊り、もともと踊り手は家々の長男に限られていた。獅子頭は、剣獅子、玉獅子、巻獅子の三頭がいずれも黒塗である。現在、初山では三組の獅子頭を所有しており、一番古い獅子頭は川崎市重要郷土資料に指定される。(12)

「小向の獅子舞」の場合は、八幡神社の境内で三匹獅子舞がおこなわれる。仲立一人、箒の娘が十数人、笛四人、歌上げが数人、大太鼓

獅子舞一覧表

	土俵の有無	獅子頭の名称	カシラの型	道行（行列の参加者）・その他	備　　考
		父獅子、母獅子、子獅子	獅子型	月日の旗2、艝を持った花笠4、天狗1、バンバ1、獅子3、笛師数名、歌師数名	
		父獅子、母獅子、子獅子	竜頭型	獅子3、歌数名、笛吹数名、ササラ子3	
	○	剣獅子、女獅子、巻獅子	獅子型	獅子3、岡崎（鬼）1、艝を持った花笠2、笛役７、歌役4、万灯	『日本獅子舞来由』
	○	男獅子、女獅子、子獅子	獅子型	獅子3、バンバ1、天狗1、花笠2、笛4、歌2、万灯	『日本獅子舞来由』
	○	男獅子、女獅子、子獅子	獅子型	獅子3、鬼1、艝を持った天狗1、岡崎（ヒョットコ）1、笛役６、歌役７、万灯	
	○	雄獅子、雌獅子、久（臼）獅子	獅子型	獅子3、幣負い（天狗）	サイコロ賭博
	○	剣獅子、玉獅子、巻獅子	獅子型	獅子3、幣負い（天狗、昔はヒョットコ）、笛役、歌役	サイコロ賭博
	○	大獅子、中獅子、女獅子	獅子型	獅子3、仲立2、ササラ子、弓張提灯2、笛吹数名	
		牡獅子、牡獅子、牝獅子	獅子型	獅子3、露払い（天狗）1、蝿追い（ヒョットコ）1、笛4、歌4、ササラ4、金棒2、法螺貝2、花籠振1対	
		雄獅子、雌獅子、子獅子	獅子型	獅子3、蝿追い（天狗）1、ササラ子ども2、大万灯持1、小万灯持2、法螺貝3、笛役数名、歌上げ数人	
		剣獅子、玉獅子、巻獅子	（獅子型）	（不詳）	獅子頭は前頭部と後頭部が一体で木で覆われているのが特徴
		剣獅子、玉獅子、巻獅子	（獅子型）	（不詳）	
		女獅子以外、名称不詳	竜頭型	（不詳）	
		名称不詳	（獅子型）	（不詳）	張り子

神奈川県の三匹

	県指定	名　　称	所　在　地	奉納場所	目　的	実施日	
1	○	三増の獅子舞	愛甲郡愛川町三増	八坂神社 (諏訪神社)	雨乞い等	7月18日	
2	○	鳥屋の獅子舞	相模原市津久井町鳥屋	諏訪神社	山村祈雨	8月14日	
3	○	下九沢の獅子舞	相模原市下九沢	御獄神社		8月26日	
4	○	大島の獅子舞	相模原市大島	諏訪明神社		8月22日	
5		田名の獅子舞	相模原市田名	田名八幡宮		9月1日	
6	○	菅の獅子舞	川崎市多摩区菅	薬師堂	虫送り・ 風送り	9月19日	
7	○	初山の獅子舞	川崎市宮前区初山	菅生神社	菅生神社の 例祭	10月3日	
8	○	小向の獅子舞	川崎市幸区小向	八幡神社	豊年万作・ 無病息災	8月8日	
9	○	鉄町の獅子舞	横浜市青葉区鉄町	鉄神社	疫病退散	10月4日	
10	○	牛込の獅子舞	横浜市青葉区旧石川町 (現・あざみ野)	驚神社・神明社	疫病退散・ 五穀豊穣	10月10日	
11		(矢部の獅子舞)	相模原市矢部	村富稲荷神社		廃　絶	
12		(黒川の獅子舞)	川崎市麻生区黒川	汁守神社		廃　絶	
13		(南河原の獅子舞)	川崎市幸区南河原	宝蔵院	雨乞い	廃　絶	
14		(箕輪町の獅子舞)	横浜市港北区箕輪町	諏訪神社		廃　絶	

※ (1) 実施日は、平成19年度のものである。最近は、祭礼日に近い日曜日におこなわれることが多い。
(2) 県指定とは、神奈川県指定無形民俗文化財をさしている。

一人の加役がある。笛や歌上げは古老の役である。獅子舞は描かれた土俵を踊り場とする。特徴は踊りが勇壮で、歌舞伎舞踊のすり足がみられる点である。また、大太鼓があり、打ち手が太鼓の両側で両面打ちをすることである。獅子舞は紫竜とも呼ばれた。享保（一七一六～一七三五）の頃、顕妙院日義という僧が諸国行脚をおこない、その際、習得した獅子舞を郷土に伝えたといわれる。獅子頭は大獅子、玉獅子、中獅子の三頭であるが、赤塗の玉獅子以外は黒塗である。いずれも東天紅という和鶏の羽毛を獅子頭に付けている。(13)

「牛込の獅子舞」の場合は、元石川町の旧牛込地区の人たちによって、獅子舞が驚神社と神明社に奉納される。踊りは、獅子の三人、天狗面の蝿追い（幣負い）一人、女装の餝二人、万灯持ちの三人からなる。これらの役をつとめるのは牛込地区で生まれた青年男子で、とくに獅子役と蝿追い役は長男がつとめた。他に、法螺貝三人、笛・歌上げが数人おり、これは古老の役である。口承によると、元禄（一六八八～一七〇三）の頃、悪疫流行の際に招来された。獅子頭は、雄獅子、雌獅子、子獅子の三頭で、いずれも赤塗である。この獅子舞は大正時代初頭に本県民俗芸能として初めて学界に紹介されたものである。(14)

「鉄の獅子舞」の場合は、杉山神社と青木神社を合祀した鉄神社でおこなわれている。現在の鉄町は明治初期までは上鉄、中鉄、下鉄の三村に分かれており、三匹獅子舞は上鉄に伝わっていた。かつては厄払いのため、村の家々を舞いながら歩き、のち神社へ奉納し、「ながや」を屋号とする家に戻り、獅子頭を蔵に納めた。伝承によれば、慶長（一五九六～一六一四）の頃、上鉄村に疫病が流行った際に「ナガヤ」の屋号を持つ旧家が武蔵国是政村（現東京都府中市是政）から、悪疫退散の祈祷のために移入したといわれている。もうひとつの説によると武蔵国高麗村（現埼玉県日高市高麗）から伝わったともいう。

獅子舞は、腹に付けた太鼓を打ちながら、笛と唄に合わせながら踊る。構成は花籠振り四人、法螺貝吹き一人、金棒一人、餝摺り四人、露払い（ヒョットコ面を被った蝿追い）一人、天狗一人、獅子役四四人、笛三人、唄三人である。獅子役は奥義が外部に漏れないように各家の長男があたった。獅子頭は、雄（巻）獅子、雌（玉）獅子、剣獅子の三頭で、いずれも黒漆塗りである。鶏の羽毛をつけ、背中の幣は各家から集めた神札を長く繋いで垂らしている。天狗は手に剣と幣束を持ち、瓢箪から花をまく。ヒョットコは軍配扇を持つ。以前は腰に木製の男根をつけた。餝摺りは男衆が女装している。(15)

そのほかに、現在では三匹獅子舞の伝承が途絶え、演じられていないが、獅子頭だけが残っている事例を紹介する。獅子頭が残っていることから、その地域ではかつて三匹獅子舞が演じられていたことがわかる。

横浜市港北区箕輪町の諏訪神社には、雄獅子二頭と雌獅子一頭が残っている。この獅子頭は、竹を編んで獅子とし、その上に和紙を重ねた一閑張りで出来ており、きわめて軽量なものである。この獅子頭を用いて大正中期に雨乞い行事がおこなわれたことが伝承されているの

で、おそらく三匹獅子舞は大正時代初期頃から衰退しはじめ、次第に滅失していったらしい。[16]

川崎市多摩区黒川の汁守神社には、剣獅子、巻獅子、玉獅子の獅子頭二組が残されており、一組は同神社に、もう一組は川崎市市民ミュージアムに収蔵されている。ミュージアムが収蔵しているものは川崎市重要郷土資料に指定されている。獅子頭は黒川にある梅沢家の屋根裏で発見された。黒川の三匹獅子舞は八月二八日の風祭に梅沢家を宿（ヤド）とし、三匹獅子と天狗面をつけた者が金棒・鰥・法螺貝を手に、練り歩いてから汁守神社へ戻ったという伝承が伝わっている。[17]

相模原市矢部の村富稲荷神社には、剣獅子・玉獅子、巻獅子の三つの頭が残っている。この獅子頭は頭部全体を木で作っているのが特徴である。また、剣獅子の頭裏側に文化三年（一八〇六）」の墨書銘があり、製作年代がわかる。玉獅子には、製作者の「藤原清方作」という銘がある。三匹獅子舞そのものは明治時代初期頃に途絶えたといわれ、どのような踊りであったかはわからない。[18]

武蔵国橘樹郡南河原村（現川崎市幸区都町）には、雨乞い獅子といわれる三匹獅子舞があり、同地の宝蔵院でおこなわれていたことが『新編武蔵風土記稿』に記されている。昭和四七年（一九七二）に実施された同院の調査の際によって獅子頭が発見されている。獅子頭の後部には踊り手の頭に、取り付けるために楕円状の笊がついている。[19]

以上の事例をもとに、神奈川県域の獅子舞について整理し、表にしたものである〔表　神奈川県域の「三匹獅子舞」一覧表を参照〕。それぞれの獅子舞には、三匹獅子舞の名称はついていない。各地元では、ほとんどシシマイ（獅子舞）とよばれており、獅子舞関係者のなかには「三頭獅子舞」と言う人たちが存在する。獅子舞の目的をみると、三匹獅子舞は農耕儀礼といっても確かに過言ではないかと思われる。

2．各県域における三匹獅子舞の事例

ここでは、三匹獅子舞の諸相を理解すると同時に比較分析するために必要な資料として各地の事例をあげておこう。

青森県津軽郡竹館村沖館の場合、三つ獅子は懈怠なく行われる。怠る年があると獅子が夢枕に立って、悪病がはやったりするという。旧盆の十四日に踊るのを正式とし、その晩にとくに〈墓参り〉の踊りがあると。そのほかは旧八月一日、同一五日夜、九月一日の村の休日に演じ、九月下旬ころの〈秋さなぶり〉に獅子収めをする。これを〈角もぎ〉とも呼ばれ、この日に海山のものをつけたお膳をこしらえ、所伝の全曲を踊るのが習わしであると。いまは臨時に出て、弘前で舞うこともあるし、また獅子関係者が死亡したときには、この獅子踊をもって埋葬するという。[20]

秋田県北秋田郡田代町山田（現大館市）の場合、山田獅子踊りといわれ、八月一四・一五日におこなわれている。昔は民家を宿にして、そこから支度をして行列をなして集落各所を回りながら踊ったが、今は公民館を宿にして、すべてここを中心にしておこなわれる。獅子には腰鼓がなく、手には何を持たないで踊る。雄獅子、中獅子、雌獅子の三匹が山から里へ下り、供物を受けて山に帰る仕様を演じ、最後に

雌獅子を求めて雄獅子二匹が恋敵となり奪い合い、和解するという。口伝によると、慶長七年に佐竹候が水戸から秋田へ転封の際に慰めるため家来たちが獅子踊りを供覧したのが始まりで、その後集落の若者たちが万年豊作と無病息災を祈念して踊ったのが、今に伝わっているという。[21]

福島県伊達郡梁川町新田（現伊達市）の場合、古くは獅子踊と呼ばれていて、一般に「愛宕の獅子踊」といわれている。四月二〇日の愛宕神社の祭礼におこなわれ、昭和四〇年頃までは七月二四日であった。獅子舞は親獅子（雄獅子）、中獅子、子獅子各一名、太鼓打ち一名、「ささらすり」一人で構成されている。獅子役はかつて長男に限られていた。親獅子と中獅子が子獅子を奪い合うもので、親獅子が二回負ける。ヒョットコ面を被った「ささらすり」は道化た仕種で、それとなく獅子を導くもので、決まった所作はない。三匹の獅子役は、いずれも太鼓を付けているが、撥を持たず、太鼓を打つ所作もほとんどなくなりつつある。伝来については、鎮守の愛宕神社を延宝二年（一六七四）に江戸芝の愛宕神社から分霊を勧請した頃、悪疫退散と五穀豊穣を祈念して奉納するになったと伝えられている。[22]

茨城県行方郡牛堀町上戸（現潮来市）の場合、一一月二三日に国神神社拝殿前で三匹獅子舞がおこなわれる。その構成は、天狗（猿田彦命）一名を先頭に、雄獅子、中獅子、雌獅子の三名、おかめ一名、火男一名の順で舞場に登場して踊る。その他に、笛四名、大太鼓一名、小太鼓一名である。踊りは、勇壮で大振りな動作で、三匹獅子舞のほかに天狗やヒョットコの舞があわせて奉納される。社伝によると、一三九五年（応永二）、氏子が三体の獅子面を奉納し、五穀豊穣を祈ったものが始まりとされ、それ以来、随時、舞が奉納されたという。現在も古式伝統にのっとって続けられている。[23]

栃木県河内郡河内町逆面の場合、八月一五日の風祭りの時、白山神社でおこなわれる。ワタリの順番は、先達（露払い）、扇子二名、額、弓、棒二名、笛、御幣、番獅子（年寄獅子）、御幣、二番獅子（若獅子）、花カゴ、雌獅子、花カゴである。獅子は河内町関白より教わったので、「天下一関白流の獅子舞」といわれる。元中年間（一三八四～一三九二）に獅子頭を買ってきたという。この頃、流行病があったため、それを祓うために獅子舞を始めたといわれる。獅子の役は一〇年やらないと一人前にならないといわれた。昔は義務的に獅子をやらされたが、次三男も興味があれば、挑戦できた。[24]

群馬県前橋市上泉町の場合、一月一七日に諏訪神社の境内でおこなわれる。中央が雌獅子、向って右側に法眼、左側が雄獅子と呼ばれる。テンポの遅い踊りで、独特の足さばきと手で身体を大振りに動作する踊り方である。笛は三名ずつ交代で吹く。花笠「ビンサザラ」は、二名の子供が花笠を被って竹の「ササラ」を持ってすり合わせ音を奏でる。この音は疫神がいやがるといわれている。以前は獅子舞の役者になれるのは、地元生まれの長男に限られていた。[25]

千葉県館山市見物の場合、海南刀切神社の祭日である七月一四日・一五日に東伝寺を出発して奉納される。行列は氏子総代、神職、太鼓、万燈、旗五名、注連縄二名、弓、ササラの少女四名、雌獅子・中獅子・雄獅子、笛五名である。神社の境内に入ると、左右にササラが二

名ずつに分かれる。三匹の獅子が縦に並んで踊りが奉納される。はじめに縦に並んだ三匹の獅子がその場で一緒に三度のしぐさを繰り返して踊る。終わりに雌獅子が注連縄潜りをおこなう。つぎに中獅子が注連縄の前で踊り、注連縄を潜る。雄獅子が注連縄の前で踊り、最後に弓潜りがある。そして三匹が一緒に踊って、お辞儀をして終わる。(26)

埼玉県桶川市小針領家の場合、鎮守氷川諏訪神社でおこなわれる獅子舞で「諏訪のささら」、通称「ササラ」として知られている。祭日は、明治末年までは七月二六・二七日の二日間で現在では九月一五日だけになっている。二日かかりでおこなっていた頃は、初日にムラ回りといって地区内にある四つの小社を回って踊り、二日目に氷川諏訪神社で踊っていた。三匹の獅子は法眼ともいわれる大獅子（剣）、中獅子（剣角二本）、雌獅子（角なし）である。社前に設けられた土俵がシバと呼ばれる舞場である。土俵の右手には、天狗一名、法螺貝一名、木太刀使い数名、六尺棒数名、花笠四名、笛方、獅子役三名の順に勢揃いし、法螺貝を合図に道中列をおこなう。参道などを通って神社に到着し、土で踊る。掛り物は笹（幣束）と梵天の二種があり、掛る物が変わるだけで所作は変わらない。(27)

同県鴻巣市原馬室の場合、一般には馬室のササラと呼ばれる。七月一五日に原馬室内の五社を回るが、昭和四〇年頃までは七月一四、一五日の両日に各戸を回っていた。法眼、女獅子、後獅子の三名、ササラを持った花笠二名、ササラ摺り三名、横笛四名、笛頭一名、歌方一名、などの構成である。祭日の夜、「オカタモリ」といって黒塗りの椀に山盛りによそられたご飯（オタカモリ）を出され、これを全部食べて早く立派な獅子役者になるよう歌方より励まされる。この行事は第二次世界大戦前まではおこなわれていた。ここには、その由来を示す文献として「馬室郷獅子舞略縁起」と称する伝書があり、「見ると眼が潰れる」といわれ、獅子頭といえどもこれを見ることは許されなかった。(28)

東京都中野区江古田の場合、三匹獅子舞は五穀豊穣や無病息災などに霊験があるとされ、一九五二年（昭和二七）以降から毎年一月の第一土・日曜日におこなわれる氷川神社の祭礼に奉納される。それ以前は隔年で旧暦九月二九日におこなわれていた。大獅子、中獅子、女獅子の三名、花笠四名、朱雀・青龍・玄武・白虎の四名、笛九名などから構成されている。三匹獅子舞は野外舞台で踊られ、大獅子による「帯の舞」において、帯を飲み込む所作には、帯を病魔と見立てて悪疫を祓い、災害を除いて氏子の安泰を守護する意味があるという。この帯は安産のお守りになり、げんざいでも妊娠した人がいると、獅子に帯を飲んでもらう。(29)

山梨県北都留郡丹波山村の場合、本村熊野神社の七月十五日の祭りに一人立三頭の獅子舞がおこなわれる。獅子は大夫（剣）、小大夫（玉）、雌獅子（一本角）と呼ばれる。腹に太鼓は付けていないが、両手には桴を持っている。獅子役以外に、青年が女装し、花笠をかぶったササラ摺りの役が四名、笛役が四、五名ほどの役がある。獅子頭は飛龍権現を祀った大家と呼ばれる家に納めておく。祭礼当日、この庭で踊ってから熊野神社へ行き、ここでの踊りが済むと各部落の神社を回って踊る。これを宮詣りという。大家の家には寛文元年（一六六一）

福島県の「三匹獅子舞」一覧表

No.	名　称	伝　承　地	期　日	場　所
1	大波住吉神社の三匹獅子舞	福島市	10月10・11日	住吉神社
2	山本屋八坂神社の獅子舞	伊達郡川俣町	10月1日	八坂神社
3	小綱木八幡神社の獅子舞	伊達郡川俣町	10月5日	八幡神社
4	箱崎の獅子舞	伊達郡伊達町	4月24・25日	愛宕神社
5	川前の愛宕獅子舞	伊達郡梁川町	旧9月24日	愛宕神社
6	向川原の観音様獅子舞	伊達郡梁川町	4月17日、10月15日	観音堂
7	新田の愛宕獅子舞	伊達郡梁川町	4月24日	愛宕神社
8	除石の観音堂獅子舞	伊達郡梁川町	10月15日	観音堂
9	下大石獅子舞	伊達郡霊山町	4月20日	霊山神社
10	上手渡小志貴神社牡丹獅子舞	伊達郡月舘町	10月17日	小志貴神社
11	布川熊野神社獅子舞	伊達郡月舘町	10月19日	熊野神社
12	羽山神社三匹獅子舞	伊達郡月舘町	10月17日	羽山神社
13	杉沢の獅子舞	安達郡岩代町	4月24日、11月3日	愛宕・羽山・稲荷各神社
14	初森の獅子舞	安達郡岩代町	11月3日	諏訪神社・羽山神社
15	茂原の獅子舞	安達郡岩代町	10月8日、10月21日	日山神社・熊野神社
16	滝洞の三匹獅子舞	安達郡岩代町	5月5日	諏訪神社
17	仲洞の三匹獅子舞	安達郡岩代町	5月5日	諏訪神社
18	東方の三匹獅子舞	安達郡岩代町	5月5日	諏訪神社
19	音路の獅子舞	郡山市	7月28日	音路太子堂
20	岩倉の獅子舞	郡山市	旧9月14・15日	鬼渡神社
21	糠沢の三匹獅子	郡山市	11月3・4日	津島・愛宕・菅船神社
22	北高倉の三匹獅子舞	郡山市	4月3日	菅布禰神社
23	南高倉の三匹獅子舞	郡山市	11月3日	菅布禰神社
24	上上石の三匹獅子	郡山市	旧9月25日	逆木神社
25	木目沢の三匹獅子舞	郡山市	11月2日	三渡神社
26	柳橋の三匹獅子舞	郡山市	4月15・16日、10月16・17日	菅布禰神社
27	日照田の獅子舞	須賀川市	7月14日	八坂神社・諏訪神社ほか
28	塩田の獅子舞	須賀川市	4月29日	雲水峰神社
29	田中の獅子舞	須賀川市	7月14日	八坂神社
30	上塩田の三匹獅子舞	須賀川市	11月3日	社寺・宿
31	里守屋の三匹獅子舞	岩瀬郡岩瀬町	旧6月16・17日	観音堂
32	梅田の三匹獅子舞	岩瀬郡岩瀬町	7月14～16日	熊野神社
33	中田のささら	石川郡石川町	9月15日	八坂神社・宿
34	北山のささら	石川郡石川町	9月19日	津島神社・宿
35	竜崎の獅子舞	石川郡玉川村	10月10日	若宮八幡神社
36	南宿の獅子舞	石川郡玉川村	10月10日	都々古別神社
37	西郷士・北宿の獅子舞	石川郡玉川村	10月10日	都々古別神社
38	論田の獅子舞	東白川郡古殿町	秋彼岸前後の丑の日	湯殿山神社
39	八ケ久保・薄木の獅子舞	東白川郡古殿町	10月第一日曜日	北向湯殿神社・熊野神社ほ
40	明王様の三匹獅子	田村郡三春町	7月21日	田村大元神社
41	滝の三匹獅子	田村郡三春町	11月3日	滝稲荷神社
42	蛇石の三匹獅子	田村郡三春町	(11月3日)	王子神社
43	樋渡の三匹獅子	田村郡三春町	11月3日	樋渡神社
44	実沢の三匹獅子	田村郡三春町	11月1・2日	高木神社
45	垢潜の三匹獅子	田村郡三春町	11月1・2日	天日鷲神社
46	小野大倉の獅子舞	田村郡小野町	10月1日	塩釜神社
47	浮金の小獅子	田村郡小野町	9月15日	菅布祢神社
48	上羽出庭の三匹獅子	田村郡小野町	(9月30日)	諏訪神社
49	夏井の三匹獅子舞	田村郡小野町	(9月15日)	諏訪神社
50	田子屋の三匹獅子舞	田村郡大越町	11月1日	稲荷神社
51	入三洞の三匹獅子舞	田村郡大越町	11月1日	稲荷神社
52	黒川の三匹獅子	田村郡常葉町	10月25日	山津見神社
53	常葉の三匹獅子	田村郡常葉町	10月25日	子松神社
54	光大寺の三匹獅子	田村郡船引町	4月8日、8月8日	東方観音堂
55	今泉の三匹獅子	田村郡船引町	旧3月14日、11月1・2日	愛宕神社・今泉神社
56	石沢の三匹獅子	田村郡船引町	11月1・2日	鹿島神社・熊野神社
57	石森の三匹獅子	田村郡船引町	11月1・2日	鹿島神社
58	荒和田の三匹獅子	田村郡船引町	4月18日、11月1日	観音様・三渡神社
59	遠山沢の三匹獅子	田村郡船引町	11月1日	羽黒神社
60	板橋の三匹獅子	田村郡船引町	11月1日	御霊神社
61	岩井沢の三匹獅子舞	田村郡都路村	11月3日	天日鷲神社ほか
62	熊倉の三匹獅子舞	西白河郡西郷村	(旧6月1日)	熊野神社・八雲神社ほか
63	三城目の獅子舞	西白河郡矢吹町	10月2日	御霊神社・景政神社ほか
64	明新の獅子舞	西白河郡矢吹町	10月2日に近い土日曜日	住吉神社
65	渡瀬の獅子舞	東白川郡鮫川村	10月1日	熊野神社・北の神社ほか
66	富田の三匹獅子舞	東白川郡鮫川村	(旧7月14日)	東光寺阿弥陀堂
67	中野の三匹獅子舞	東白川郡鮫川村	(旧7月15日)	八幡神社
68	東神宿の彼岸獅子舞	会津若松市	3月18日～21日	市内の民家
69	天寧の彼岸獅子舞	会津若松市	3月18日～21日	市内の民家
70	居合の彼岸獅子舞	会津若松市	3月21日	市内の民家
71	北滝沢の彼岸獅子舞	会津若松市	3月21日	市内の民家
72	本滝沢の彼岸獅子舞	会津若松市	3月21日	市内の民家

福島県の「三匹獅子舞」一覧表

73	荒久田の彼岸獅子舞	会津若松市	3月21日	市内の民家
74	小松の彼岸獅子舞	会津若松市	3月21・22日	村内・市内の民家
75	大和田の彼岸獅子	河沼郡河東町	春彼岸	民家
76	郡山の彼岸獅子	河沼郡河東町	春彼岸	民家
77	赤松の彼岸獅子舞	耶麻郡磐梯町	3月18日～20日	赤龍寺・民家
78	西久保の彼岸獅子舞	耶麻郡猪苗代町	春彼岸中日	地区公民館ほか
79	下柴の彼岸獅子	喜多方市	3月18日～24日	市内の民家
80	中村の彼岸獅子	喜多方市	3月18日～24日	市内の民家
81	西勝の彼岸獅子	大沼郡会津高田町	3月18日～21日（春彼岸）	町内
82	栗生沢の三ツ獅子	南会津郡田島町	6月11日～13日、二百十日前祭	大山祇神社境内
83	高野の三匹獅子舞	南会津郡田島町	8月17日、二百十日前祭ほか	稲荷神社境内ほか
84	大坪の獅子舞	相馬市	旧7月27日	諏訪・岡田・大雷各神社
85	小池の獅子舞	相馬郡鹿島町	4月20日	鹿島御子神社・民家
86	塩崎の獅子舞	相馬郡鹿島町	4月21日	日吉神社・民家
87	大原の獅子舞	原町市	1月1日、4月17日	綿津見神社・民家
88	金谷の獅子舞	相馬郡小高町ほか	1月1日	山津見神社
89	比曽の三匹獅子舞	相馬郡飯舘村	9月第三日曜日	田・愛宕・稲荷各神社ほか
90	草野の三匹獅子舞	相馬郡飯舘村	旧9月18日	白山神社・民家
91	津島の獅子舞	双葉郡浪江町	10月第一日曜日	稲荷神社・民家
92	葛尾の三匹獅子	双葉郡葛尾村	10月8・9日9日、旧9月9日	日山神社・磯前神社
93	熊川の獅子舞	双葉郡大熊村	8月16日	諏訪神社
94	高田島獅子	双葉郡川内村	5月5日、9月15日	諏訪神社・八幡神社
95	西郷獅子	双葉郡川内村	5月5日、9月15日	諏訪神社
96	西山獅子	双葉郡川内村	5月5日、9月15日	諏訪神社
97	町獅子	双葉郡川内村	5月5日、9月15日	諏訪神社
98	中平窪の獅子舞	いわき市	8月3・4日	北野神社
99	下平窪の獅子舞	いわき市	9月第一土日曜日	諏訪神社・弁天社ほか
100	北赤井の獅子舞	いわき市	8月最終土日曜日	諏訪神社
101	南赤井の獅子舞	いわき市	9月最終土日曜日	諏訪神社
102	高坂の獅子舞	いわき市	9月14日	住吉神社
103	白水の獅子舞	いわき市	8月5日	願成寺・白水阿弥陀堂
104	高野上の獅子舞	いわき市	9月第二日曜日	鹿島神社ほか
105	高野中の獅子舞	いわき市	10月第二日曜日	鹿島神社ほか
106	好間八坂神社の獅子舞	いわき市	9月第一土日曜日	八坂神社
107	上岡の獅子舞	いわき市	7月第四日曜日	愛宕神社
108	下仁井田の獅子舞	いわき市	8月下旬の土日曜日	諏訪神社ほか
109	下小川の獅子舞	いわき市	9月第一日曜日	二俣・青麻・八坂各神社
110	高萩の獅子舞	いわき市	9月第一日曜日	諏訪神社
111	合戸の獅子舞	いわき市	8月末から9月上旬の土に曜	諏訪神社・密蔵院ほか
112	浮矢の獅子舞	いわき市	8月末または9月第一日曜日	御嶽神社・湯殿山ほか
113	渡戸の獅子舞	いわき市	8月前後の日曜日	御塚神社ほか
114	楢木の獅子舞	いわき市	8月前後の日曜日	御塚神社・正福院ほか
115	高野の獅子舞	いわき市	8月前後の日曜日	権現様・稲荷神社ほか
116	下永井軽井沢の獅子舞	いわき市	9月7・8日に近い土日曜日	御塚神社・熊野神社ほか
117	下永井本郷の獅子舞	いわき市	9月7・8日に近い土日曜日	御塚神社・熊野神社ほか
118	佐糖の獅子舞	いわき市	9月15日	八幡神社ほか
119	入旅人の獅子舞	いわき市	9月4日	小土神社・地蔵堂
120	宝坂の獅子舞	いわき市	8月23日	地蔵堂
121	上平石の獅子舞	いわき市	8月第四日曜日	薬師堂
122	黒田の獅子舞	いわき市	8月第四土日曜日	不動堂・満照寺
123	石住の獅子舞	いわき市	9月18日	湯殿山神社
124	滝尻の獅子舞	いわき市	9月15日	稲荷・諏訪両神社ほか
125	江名の獅子舞	いわき市	8月26・27日	諏訪・八坂両神社
126	豊間の獅子舞	いわき市	8月20日過ぎの土日曜日	諏訪神社・津明神ほか
127	沼ノ内の獅子舞	いわき市	8月下旬の土日曜日	諏訪神社ほか
128	上高久の獅子舞	いわき市	9月第一日曜日	二荒・片岡両神社ほか
129	下高久の獅子舞	いわき市	旧8月14・15日	八剣・二荒両神社ほか
130	中山の獅子舞	いわき市	旧7月26・27日	諏訪・熊野両神社ほか
131	下荒川の獅子舞	いわき市	9月第一土日曜日	諏訪神社
132	下大越の獅子舞	いわき市	9月14・15日	諏訪・白山両神社ほか
133	菅波の獅子舞	いわき市	9月14・15日	大国魂・雷両神社ほか
134	北白土の獅子舞	いわき市	9月14・15日	三島八幡神社
135	四ツ波の獅子舞	いわき市	10月第一日曜日	八坂神社・石森観世音ほか
136	上片寄の獅子舞	いわき市	8月第三日曜日	聖観音堂（三谷渡神社）
137	絹谷の獅子舞	いわき市	9月最終日曜日	諏訪神社
138	北神谷の獅子舞	いわき市	9月最終日曜日	白山神社
139	黒田のささら	いわき市	8月第四土日曜日	不動尊
140	滝尻の棒ささら	いわき市	9月15日	稲荷・諏訪両神社ほか
141	熊野神社の獅子舞（国指定）	いわき市	8月1日	熊野神社

に角兵衛より武州多摩郡沢井村福島庄左衛門に宛てた「本朝獅子舞来由之巻」という巻物が保存されている。[30]

新潟県北蒲原郡笹神村発久（現阿賀野市）の場合、八月二〇日、鎮守である発久神明宮の祭礼に演じられる。太鼓二名、笛一名、獅子三名、メン一名、花笠三名のほか、綱持ちなどの役があった。太鼓は音頭をとりながら唄い、笛が合わせる。獅子は先獅子と後獅子からなる牡獅子二名と牝獅子一名からなる。メンの道化役はヒョットコで、獅子の先後になり、場を盛り上げる。かつては長男だけしか参加できなかった。小さい子供は獅子に噛んでもらうと丈夫になるといわれている。[31]

長野県小県郡真田町（現上田市）の場合、ミカシラジシ（三頭獅子）と呼び、皇大神社の祭日は本来八月一六日で、その前夜に踊られたが、現在は土・日曜日におこなわれた。凶作の年、疫病の流行した年はおこなわれなかった。神酒の口一名、天狗に扮した禰宜一名、獅子二名、三天王三名、笛六名、太鼓一名、太鼓背負い一名、笹持ち一二名の構成である。この地域の三匹獅子舞は、子どものササラ踊りがかならず付いている。獅子役に就くものはこの土地に三代住んだ者あるいは他国へ出て行くことの少ない長男という規制がかけられている。[32]

このように、神奈川県域や県外域における三匹獅子舞の様相をみると、雄二匹と雌一匹の組み合わせを基本にした枠組などは共有しているが、期日、踊りの構成・内容など、千差万別であることがわかる。確かに些細な部分をみていけば、きわめてデリケートであり、興味深いことばかりであるといえよう。したがって、三匹獅子舞を研究対象にした場合、わが国においてどのように発生して展開してきたかという課題だけでなく、今後、現代社会のなかでどのように継承されていくのかという課題にも惹起しなければならないだろう。では、三匹獅子舞の具体的な課題については順次述べることにする。

（二）三匹獅子舞の分布状況

前述したように三匹獅子舞の実態をすべて精確に捉えることはむずかしいが、ここでは三匹獅子舞の分布とその具体的な事例を一部紹介することにする。この三匹獅子舞は東日本に顕著にみられる民俗芸能であるが、一体、何か所でおこなわれているのだろうか。具体的に正確な数を把握することはむずかしいが、前述した笹原論文によると、廃絶を含めて、北海道一三、青森県一〇〇以上、秋田県一〇〇以上、山形県三〇程、福島県二五〇前後、宮城県一、茨城県三〇以上、栃木県一〇〇以上、群馬県二五〇以上、千葉県一〇〇以上、埼玉県二五〇以上、東京都八〇（区内は一一）以上、神奈川県一四、山梨県八、新潟県約七〇、長野県二五、すなわち東日本で一、四〇〇余ヶ所にみられるという〔笹原、二〇〇一〕。これによれば、三匹獅子舞は現在およそ一四〇〇ヶ所の地域で演じられていることになる。今回は、これらの地点すべてを地図上に落とす作業はできなかったが、できるだけ重複しない市町村を中心に、わが国における「三匹獅子舞の分布図」を作成してみた。[33]

作成した分布図からわかるように、三匹獅子舞は、北海道南部、鹿

三匹獅子舞の分布図
鹿踊り系
太鼓踊り系

三匹獅子舞の分布図－関東地方－

踊りで有名な岩手県を除く東北地方、関東甲信越地方に分布しており、とくに関東地方には色濃く分布していることが一目瞭然である。さらに、福島県の場合は郡山市を中心にした中通り地域やいわき市に集中してみられることや、青森県の場合は下北地方にはみられず、津軽地方に分布していることなどがわかるだろう。

1. 福島県の「三匹獅子舞」にみる特徴

東北地方では、福島県に三匹獅子舞が多く分布していることはさきに指摘したとおりである。そこで、悉皆調査の結果が『福島県の民俗芸能』として体系的にまとまって報告されているので、そのデータをもとに福島県の三匹獅子舞一四一例について、名称・期日・奉納場所をメルクマールにして一覧表した[34]。そこから、わかった二、三の事柄について、言及してみたい。

獅子舞の名称としては、「何々の獅子舞」が七一例と一番多く、次いで「何々の三匹獅子舞」が三九例、「何々の彼岸獅子」が一四例、「何々のササラ」が四例となる。三匹獅子舞系は郡山市・田村郡地域にみられ、彼岸獅子系は会津地域にみられる。このササラという名称は、埼玉県、千葉県、東京などでもみることができる。

つぎに三匹獅子舞が演じられる期日についてみると、三月から一一月にかけた、決まった日にみることができる。また、土・日曜日に演じられる地域もみることができる。

奉納場所は圧倒的に神社が多く、その神社も諏訪神社が一番多い。また、神社に比べて、観音堂・地蔵堂などの御堂でおこなわれる例はきわめて少ない。とくに、彼岸獅子の場合は、神社ではなく、民家に奉納されている場合が多いので、このことからも家の先祖供養と深く結びついていることがうかがえよう。

2. 関東地方における三匹獅子舞の分布

関東地方における三匹獅子舞の分布図[35]を俯瞰すると、前述したように関東地方に多く分布している。ここでは取り上げなかったが、小島美子が指摘したように枠なし型太鼓と枠付き型太鼓とをメルクマールにした分布の広がりを見ることは、大切な視点であるといえよう。この二種類の太鼓の分布は、群馬県館林市と埼玉県北埼玉郡南河原村（現行田市）あたりを結ぶ線を境界として、その東に枠なし型、西には枠付き型になるという。枠なし型太鼓は枠付き型太鼓と比較して太鼓の構造面からみるとプリミティブであるといわれているので、このように太鼓をメルクマールにした三匹獅子舞の研究も大切であるといえよう。

また、名称についてもの分布を作成していないが、千葉県の場合には、三匹獅子舞が安房地方と下総地方に色濃くみられ、前者はカッコマイ（鞨鼓舞）、後者はシシマイと呼ばれていた。さらに、安房地方では獅子舞のことをフリュウ（風流）、フリョー（降雩）などとも呼ばれるところがあったという。

三匹獅子舞の目的は、雨乞いをはじめとして、嵐除け、五穀豊穣、悪霊退散などを祈願して踊られるが、安房地方では中絶してしまった地域が多い。悪疫退散のためには、集落の境界まで行ってツジキリ

（辻切り）をおこなう場合もみられた。

三匹獅子舞の分布を捉えるだけでは、その深層にある課題を解明することがむずかしいので、今後は各地の詳細なデータをもとに比較分析を試みて再検証すべきであろう。

三、三匹獅子舞研究の問題点

三匹獅子舞について、その諸相や分布などから俯瞰していくと、そこには多くの問題点が山積していることがわかる。そこで、ここではそれらの問題点を具体的に八つ課題として提起し、それぞれのテーマについて若干の考察を試みたい。

三匹獅子舞の名称

最初に、三匹獅子舞にみられる獅子頭の「シシ」とは、一体、何をイメージ化しているのだろうか。シシのイメージは、大陸から伝来したといわれている獅子をはじめ、鹿、猪、龍などが想定されている。実際に多く見られるのは岩手県の「鹿踊り」[36]の鹿を除外すると、獅子と龍ではなかろうか。いずれにしても、具体的にイメージすることはきわめて難しい。したがって、獅子、鹿、龍などから、いわゆる獅子をひとつの概念でくくれないので、最近では獅子という字を宛てずにシシと表記する傾向がみられる。

つぎに、三匹獅子舞の名称・呼称の発生、すなわち、いつ頃から三匹獅子舞といわれるようになったのだろうか。この三匹獅子舞は、「専門用語（technical term）」（学術用語）であって、各地域では研究史の個所で前述したように、シシマイ、ササラマイ、カッコマイなどと呼ばれているのが一般的である。

そして、次第に三頭の獅子、三匹の獅子、三匹獅子舞というように変遷してきたようである。そして、いつの間にか、三「頭」から三「匹」へと変わってきている。すなわち、シシ、鹿、龍などの員数をどのような単位で数えるのか、この点とともに、「三」という数が聖数であるという説と同様に再検証すべきであろう。

「三匹獅子舞」の名称はいわゆる「獅子舞」との関連から獅子舞の名称がついているが、伎楽系の二人立獅子舞の違いを芸態面からみると、獅子踊りあるいはシシ踊りという名称にした方が明らかに理解しやすいのはないか。民俗芸能でいわれているように、東日本にいわゆる三匹獅子舞が分布し、西日本には太鼓踊り[37]が分布している。この太鼓踊りに近い民俗芸能であるならば、獅子踊りの名称を用いた場合、名称が太鼓踊りと対応してすっきりと捉えることができるのではなかろうか。したがって、三匹獅子舞を三匹獅子踊と名付けることによって、獅子舞との違いも明白にすることができるのではなかろうか。広義の場合は従来とおり獅子舞に帰属していてもよいのではなかろうか。

三匹獅子舞の目的

ここでは、三匹獅子舞が何のためにおこなわれたのかという民俗的背景について考えてみたい。この獅子舞については、民俗芸能に立脚した研究がほとんどであり、したがって民俗学・文化人類学の視点に立脚した研究は等閑視されてきたといえよう。一九三〇年代初頭に民

俗芸能として注目されてから、その間の一九四〇年代に宗教人類学者・民族学研究者の先駆者であった古野清人によって農耕儀礼の一分野として研究されてきた以外、民俗芸能研究の一分野として研究が進められてきた結果といえよう。たとえば、「三匹獅子舞」が演じられる目的として、前述してきた諸相から①悪疫退散、悪魔祓い、道浄め、②雨乞い、照乞い、豊作祈願、③先祖供養に大別できる。

飯塚好は、三匹獅子舞のおこなわれる時期が七月、八月に多いこと、さらにその目的は疫病送りや悪魔祓いの場合や、風祭りなど稲作の豊穣予祝が多いことを指摘している〔飯塚、一九八四〕。このことからも、三匹獅子舞は農耕儀礼として把握することができよう。

獅子頭の形態

獅子のカシラ（頭）についてみてみよう。その形態すなわち面相が、獅子、鹿、龍なのかということが問題になる。つぎに、剣角、巻角、玉などというように頭にどのような角がついているか。面の色は赤、黒なのかが問題となるが、獅子頭を研究するためには、山本修康が取り組んだように、頭の名称、形状、材質、頭髪、彩色、角の形状、耳の有無、目、歯列、法量など、共通のデータに基づいた視点が基本であるといえよう〔山本、一九八六〕。

カシラ（頭）は頭に被って踊るので、できるだけ軽くするように材質などに工夫が施されている。たとえば、材質では顔面にあたる部分には桐などの木材が、また頭に載せて被る部分には竹籠などが利用されていたり、あるいは竹に紙を貼ってつくった張り子のようなカシラもあったりする。そのために頭部分の重量はおよそ一．五グラム前後が多く、被っても軽いので動きやすい。因みに二人立に使用される獅子頭の重量は三．〇～五．〇キログラムが多く、これらを頭に被って飛んだり跳ねたりして踊ることはきわめてむずかしいことであるといえよう。

もうひとつは、紀年銘がある獅子頭の問題である。このことによって、頭の年代が特定でき、そこから三匹獅子舞の起源をうかがいしることができる。近年、茨城県那珂郡大宮町（現常陸大宮市）で発見された甲神社で収蔵している獅子頭は、「永正十四年（一五一七）」の銘がある。これまでの銘の年号は早くても慶長末年（一六一〇年代）以降であったから、きわめて古い時期のものあるといえよう。この一例をもって、三匹獅子舞の起源を中世末に想定できないこともないが、今後、同時期の紀年名を有した獅子頭が発見されれば、説得性がさらに高くなるので期待したい。

さらに、獅子頭は古くなると修理を施したり、新調されたりする。新調する場合、ムラ社会のなかで器用な人が獅子面を彫刻してつくったり、村外の専門家に依頼したり、さらに東京浅草の業者から購入する場合があることを指摘しておきたい。

三匹獅子舞の発生と展開

獅子頭じしんやそれらが収めてある道具箱に刻書、墨書などによって年代がわかる紀年銘が付いている場合もあるので、そこから獅子頭や三匹獅子舞の歴史的系譜をうかがうことができる。そこで、三匹獅舞の歴史的変遷を明らかにするため、巷間に伝承されてきた民俗資料だけでなく文書史料や絵画資料を積極的に援用してその解明をはかる

べきであろう。

また、三匹獅子舞の成立時期を知るためには、紀年銘だけでなく、各地で散見される「日本獅子舞来由」などの文献史料や三匹獅子舞が描かれた絵画資料なども、民俗資料とともに活用する視座が重要であろう。

発生と展開については、前述したように山路興造、小島美子などの説がある。いずれも刺激的かつ興味深い内容であり、これからも、いろいろな資料を駆使して、この問題に取り組む姿勢が大切であるといえよう。また、今回、踏み込むことができなかったが、修験道との関連性に留意すべきであろう。

描かれた三匹獅子舞

屏風図・絵巻物などの絵画の中には獅子舞図が描かれているものがある。そのなかに、神奈川県を南限として東日本に分布する民俗芸能である三匹獅子舞が描かれているものがある。この獅子舞は、江戸時代初期頃に発生したといわれ、そのことを裏付けるように江戸時代に描かれた作品の中にみられる。たとえば、江戸時代の制作で『農村民家図屏風』[38]といわれるものがあるが、これはいわゆる「四季農耕図屏風」の一隻である。穀物の蔵入れ風景などとともに三匹獅子舞が描かれている。おそらく作物の収穫感謝のために三匹獅子舞が奉納されたのではないだろうか。太鼓を叩きながら踊る獅子の三人、花笠を被り太鼓を叩く二人、笛を吹く二人の計七人の姿が生き生きと描かれている。

また、江戸時代後期の制作で『江古田獅子舞巡行絵巻』[39]といわれるものがあり、現在の東京都中野区江古田に伝わる当時の三匹獅子舞の行列を描いている。獅子頭を被った三人が腹部に付けた太鼓をバチで打っている様子や花笠を被り、手にササラや鉦などを持った囃子方の人々とともに克明に描写されている。

いずれにしても、三匹獅子舞の発生と展開を考えるうえで、『日本獅子舞来由』とともに絵画資料である三匹獅子舞図は重要な資料（史料）である。[40]

三匹獅子舞にみられる由来・霊験譚

三匹獅子舞に関する由来や霊験譚は、三匹獅子舞すなわち獅子舞の霊力性を考えるうえで重要な要素である。そこで、具体的な事例を九例あげておこう。

事例①　東京都足立区花畑では、獅子舞は元禄年間にさかのぼり、獅子頭は大洪水のときに六月村（足立区）から流れついた。昔、花畑に流行した疫病祓いの行事として始まった。[41]

事例②　秋田県雄勝郡雄勝町役内（現湯沢市）では、今から四十年ほど前、役内にムラサキバシカが流行し、ほとんどの子供が感染した。そこで一軒ずつシシを回して悪魔払いし、シシに貼ってあった紅白の紙をちぎって飲ませると、病は嘘のように治まったという。[42]

事例③　福島県郡山市片平町岩倉では、源義家が当地を訪れたとき、労を慰め、戦勝を祈って始められたという縁起的な伝承のみで明らかでない。[43]

事例④　福島県田村郡船引町石沢（現田村市）では、社伝によると大

同二年（八〇七）に常陸国から鹿島神社の分霊を勧請した際に、道中の無事を感謝して獅子頭を奉納したところ、三人の童子が現れて頭に被り、踊ったのが始まりとしている。(44)

事例⑤　福島県伊達郡霊山町下大石（現伊達市）では、地元の伝えによると享保年間（一七一六～一七三五）、住人が伊勢参りの帰途京都より獅子頭を買い求めてきて納めておいたところ、日枝神社の祭礼当日唸り声を上げたので託宣によって神意を尋ねたところ、世に出たいというので、それ以来若者に踊らせるようになった。(45)

事例⑥　福島県耶麻郡猪苗代町磐根では、源義家一行の士気を鼓舞するため踊って以来、会津藩では出陣、凱旋のときに踊るようになったとか、あるいは天正二年、会津に疫病が流行したときに踊ったのが、ちょうど春の彼岸であったので、以来無病息災と祖先の供養のために踊るようになったなどの伝承のみである。そこで、「彼岸獅子舞」といわれている。門外不出として、長男のみによって伝承されてきたという。(46)

事例⑦　東京都豊島区長崎では、御獅子のかぜに当たると風をひかないとか、「病気を背負わないように」という願いから子どもに御獅子の頭に触らせようとしたという。また、花笠についている造花は、獅子舞が終わった後、獅子を踊った人や世話役が「病気をしないように」との意味で、この花を分けあった。(47)

事例⑧　埼玉県鴻巣市原馬室では、祈禱ザサラのとき、獅子が訪れる家々では、祈禱がくるといって、田、畑、家の周辺や便所などをきれいにした。また、獅子の風にあたるよいって、体の具合の悪い者は早くよくなるよう、さらに子供などは丈夫に育つようにと、獅子の水引を頭から被させてもらうことによって村内に重病人が出るとその枕元で神官の荒舞をおこない、病魔を祓った。(48)

事例⑨　東京都足立区花畑・鹿浜では、舞が終わったのちに子どもたちが獅子頭を被せてもらうと、風邪を引かなくなる。また、花笠に付いた藤の花を、取り合うように家に持ち帰り、玄関に入って左側に掛けておくと、魔除けになる。(49)

獅子舞は悪魔祓いの霊験があるといわれるが、これら以外にも愛川町三増では、現在でも祭礼のとき、悪い病気に罹った子どもを抱いて沿道に出ていると、行道してきた獅子が口で噛む真似をして悪い病気を吸い取ってくれると言い伝えられている。また、明治の頃、この獅子舞が養蚕の豊作祈願で相模原市大島へ出かけていき、やがて獅子舞が終わり、演者たちは酒の饗応を受けてすっかり酔っ払い、獅子頭を置き忘れて帰りました。獅子頭はひとりで戻ってきたらしく、大島には残された道具箱が空になっていたそうである。その後、三増で疫病が大流行して村が滅びそうになった。獅子頭を置き忘れたということが原因となり、それ以後、獅子頭を門外不出にするタブーが生まれたという。最近では、このタブーも消えて三増の獅子舞は学校の催し物や民俗芸能大会などに出演している。このように三匹獅子舞に登場する獅子じしんに特別な呪力の存在を認めている。だからこそ、その呪力性の根拠を表徴する裏付けとして由来譚がみられる。

三匹獅子舞の芸態と演舞構成

獅子遣いの基本は、「曲」と「練り」といわれ、前者は獅子頭を上下に動かせることで、後者は獅子頭を左右に動かしながら足を前に蹴上げ、跳び舞うことであるといわれる。三匹獅子舞を構成している大きな要素は芸態であり、その核心部分が踊りや歌である。こうした芸態や演舞構成は、専門的な知識がないと解明できない。とくに、「三匹獅子舞」と「三匹シシ踊り」の差別化に関心をもっているが、その核心となるべき「踊り」と「舞」について十分な見解をもっていない。したがって、ここではこの問題について具体的に展開できなかったので、その重要性を指摘しておきたい。

伝承母体と保存会～伝承と保存～

三匹獅子舞を演じるにはいろいろと厳しい決まりがあった。愛川町三増では、踊り手は男性に限られ、しかも長男以外にはやらせなかったという。相模原市津久井町鳥屋でも長男がおこない、踊り手を退くと歌唄いや笛吹きを務めたり、新人に稽古を付けたりする世話役になったといわれている。横浜市青葉区鉄町では、長男に引継がれるのは秘伝を外部に漏らさないためだと伝えられていた。今日ではそのような言い伝えも後継者を確保することが大きな課題となり、男女を問わず参加しているのが現状である。このようななか、愛川町三増にある県立愛川高校では地域の伝統を守り、継承していくため、「伝統文化」という選択科目を設け、生徒が地元の保存会の協力を得て「三増の獅子舞」を学んでいる。このように郷土の民俗芸能として三匹獅子舞を持続させていくことは、後継者の育成をはじめ、多くの人の支援が必要である。

横浜市域の「牛込の獅子舞」では、先祖代々獅子舞と深く関わりをもっている吉村晴治宅には、一八七七年（明治一〇）、当時の当主で神明社氏子総代であった鉄太郎が家人に、「獅子舞は、元禄年間（一六八八～一七〇四）　悪疫流行の折、悪疫退散・五穀豊穣を願って八王子方面から伝えられ、以後、獅子舞を神前に奉納することで悪疫が村内に入るのを防ぐと信じ、今日まで伝えられてきた」と話したことが口伝されているという。「牛込獅子連」または「牛込獅子連中」と呼ばれた獅子舞は、宮総代の指揮下にあり、獅子役は氏子と密接に結びついており、明治初期などは戸数も少なかったので、獅子役は一人の踊り手が一五、六年も務めたという。一九七二年（昭和四七）には「牛込獅子保存会」が設立され、新しい伝承母体に受け継がれている。(50)

おわりに～まとめにかえて～

三匹獅子舞の先行研究およびその分布と諸相を眺望してくると、刺激的な問題点が数多く横たわっていることに気がつく。獅子舞を研究する研究者はきわめて多いが、演じられている獅子舞も精確な数を網羅できないほど多く、東日本に分布する三匹獅子舞でさえ、その実態を把握することがむずかしい。いままでの研究の多くは民俗芸能プロパーからアプローチされてきたが、宗教人類学者古野清人が開拓した三匹獅子舞の調査研究の成果を再検討すると、そこには民俗学プロパーにとって重要な研究分野であることが再認識させられる。

古野は、一時期研究を中断しているが一九三六年から一九六九年ま

でおよそ三〇年間にわたって東日本の三匹獅子舞の調査研究に従事してきた。その大きな特徴は、村落生活における獅子舞の儀礼上の役割、すなわち機能主義の立場から農村の獅子文化を探求する視点にある。その結果、この獅子舞の担い手は多くの場合、若者組（のちの青年会）であった点に注目している。また、一方で、三匹獅子舞の起源、この獅子舞に使用される音楽や楽器の研究、そして美学的研究の必要性も説いている。こうした問題提起を踏まえると、三匹獅子舞には、その芸態だけを問題にするのではなく、むしろムラ社会、すなわち生活空間のなかで捉えていく視点が必要であることがわかるだろう。

三匹獅子舞には、二匹の雄獅子が一匹の雌獅子を巡って争う「雌獅子隠し」というテーマを普遍的にもっている。このテーマの結末は、やがて勝った雄獅子と末長く幸せに暮らすということになっている。すなわち、三匹獅子舞は悪疫退散・厄祓いだけでなく、子孫繁栄をも表徴しているといえよう。だからこそ、三匹獅子舞は多くの地域で受け継がれてきたのかもしれない。したがって、「雌獅子隠し」というモチーフは三匹獅子舞の研究にとって従来から指摘されてきたように大切な視点のひとつである。

また、笹原亮二による三匹獅子舞の研究は体系的におこなわれており、その理論は綿密な民俗調査に裏付けられている。その研究方法を応用して、川崎、横浜市域における三匹獅子舞のモノグラフを作成されていくならば、三匹獅子舞を体系的に把握することが可能になってくるだろう。同時に、そのことは三匹獅子舞のディテールを明らかにすることに繋がるだろう。いずれにしても、今後の三匹獅子舞研究は伝承母胎に立脚して前述した視点に留意しながら、体系的に把握することが肝要であるといえよう。

こうした視点を組み込んだ研究は、三匹獅子舞の伝承母胎となった伝統的な地域社会、すなわち民俗社会が崩壊の危機に瀕している状況ではかなり困難な道であるといえるが、模索する意義はあるだろう。いずれにしても、今後も本稿で十分に検証できなかった課題について、ひとつひとつ検証していきたいと考えている。

〔追記〕三匹獅子舞との出会いは、笹原亮二氏の協力によって特別展『かながわの三匹獅子舞―獅子頭の世界―』を計画し、二〇〇五年一月に神奈川県立歴史博物館で開催したことにはじまる。終了後の同年一一月、民俗芸能学会の第一〇六回研究会において「三匹獅子舞～展示を中心に～」、二〇〇七年九月、相模民俗学会の研究会において「三匹獅子舞研究の問題点」と題して発表する機会を得た。その席上、山路興造、中村茂子、石井一躬、小島瓔禮、内田賢作の各先生方には貴重な助言等を受けたことに対して、ここに感謝の意を表したい。なお、本稿は発表要旨を骨子に執筆したものである。

註

（1）笹原亮二、一九九九、「三匹獅子舞」『日本民俗大辞典（上）』、吉川弘文館。これによると、「一人の演者が獅子頭を被り、腹部に鞨鼓風の太鼓を抱いて一匹の獅子の役を演じる一人立の獅子が、三匹一組になって獅子舞を上演する民俗芸能の総称。現地では単に獅子舞と呼ばれたり、ササラと呼ばれたり、さまざまな名称で呼ばれている。（中略）二匹の雄と一匹の雌の獅子が、太鼓を叩きながら、笛や歌と風流笠を被った子供の餝の演奏にあわせて舞うが、ヒョットコや鬼の面を被った道化や露祓いの天狗などの役が加わったり、万燈傘が立てられたりする場合もある。（中略）獅子舞の構成や演目について

もかなり多様性が認められるが、隠れた雌獅子を二匹の雄獅子が探し回る雌獅子隠しと呼ばれる演出が、多くの獅子舞において共通に認められる。中世末から近世初期にかけて京都を中心に流行した風流踊りの一派として成立した原型が関東地方に伝わり、そこからさらに東日本に広範に伝わったとされるが、秋田の佐竹氏と道地ささら、福井県小浜の酒井氏と雲浜獅子といった大名の移封に伴う伝播や、共通する由来書の存在など、伝播交流を巡るさまざまな興味深い問題の所在が近年指摘されている」と定義している。

(2) 雑誌『民俗藝術』は、一九二八年一月に「民俗藝術の會」によって創刊号が刊行された。この号には、柳田國男、折口信夫、小寺融吉、北野博美、永田衡吉、早川孝太郎らの論文が掲載されている。民俗芸術の会については、創刊号の巻末に「民俗芸術の会の記」(九五~九六頁)という記事が掲載されており、その概要をうかがうことができる。それによると一九二七年(昭和二年)七月八日に第一回の茶話会を開き、会の方針を決めている。その際の出席者は柳田國男、今和次郎、早川孝太郎、金田一京助、永田衡吉、小寺融吉らの諸氏であり、会の名称、調査研究の対象の問題、その適当な方法、及び資料の公表などについて話し合っている。同年の九月九日には第一回の談話会が開催され、盆踊りについて論じている。

(3) 本書『千葉県松戸市の三匹獅子舞』には、つぎの各論七本が所収されている。山田尚彦「行政の調査者とフィールドのあいだ」、山下晋司「民俗芸能と伝承する論理—松戸市和名ヶ谷の三匹獅子舞—」、大石泰夫「若者の民俗としての三匹獅子舞」、小林康正「伝承論の革新—獅子舞を伝えるとはどういうことか—」、上野誠「稽古とその場—「伝承」を考える—」、橋本裕之「演技の民俗誌—松戸市大橋の三匹獅子舞—」、中村仁美「獅子舞の笛の伝承」。

(4) 相模原市教育委員会から『鳥屋の獅子舞』(一九九一)、『三増の獅子舞』(一九九二)、『田名の獅子舞』(一九九三)、『下九沢の獅子舞』(一九九四)、『大島の獅子舞』(一九九五)、『三匹獅子舞の諸相』(一九九六)、および愛川町教育委員会から『三増の獅子舞』(一九九六)を刊行している。とくに『三匹獅子舞の諸相』では、相模原市域とその周辺の三匹獅子舞に関する調査成果についての問題点等の抽出を、松戸市域の調査をおこなったメンバーの三氏に依頼した成果を中心にまとめている。山田尚彦「素材としての三匹獅子舞」、小林康正「民俗芸能における〈内閉した美意識〉について(一)」、中村仁美「相模原周辺の獅子舞の音楽構造」、笹原亮二「三匹獅子舞と風流」の論考と執筆者四名による座談会「三匹獅子舞の上演を巡って」から構成されている。

(5) ここでは残念ながら取り上げることができなかったが多くの先行研究の成果があり、本稿を執筆にあたってはたいへん参考になった。たとえば、峰岸三喜蔵『写真集 獅子の詩—日本の三匹獅子舞—』(けやき出版、一九九八)、内田 賢作「埼玉の三匹獅子舞と信仰」(『埼玉民俗』第二八号、二〇〇三)・「三匹獅子舞の発生序説」(『埼玉民俗』第三〇号、二〇〇五)、大村達郎「三匹獅子舞の行事と変容」『東洋大学大学院紀要』第三四号、一九九八)、金子 淳「多摩ニュータウンにおける「伝統」と地域の紐帯」(『民具マンスリー』第三七巻第三号、二〇〇四)、山本 修康「獅子頭の変遷について」(『民具マンスリー』第二〇巻第二号、一九八七)、パルテノン多摩歴史ミュージアム編『図録 落合白山神社の三匹獅子舞—都市化とともに変わる「伝統」—』(二〇〇三)、町田市立博物館編『図録 多摩の三匹獅子舞—獅子頭・面・太鼓—』(一九八六)・『図録 獅子頭—東日本を中心に—』(一九九六)・『図録 獅子頭—西日本を中心に—』(一九九七)などがある。

(6) 愛川町教育委員会編『三増の獅子舞』(一九九六)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(7) 青地竹次「相模高座郡の獅子舞」『民俗芸術』一三一一(一九三〇)、相模原市教育委員会編『大島の獅子舞』(一九九五)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(8) 相模原市教育委員会編『下九沢の獅子舞』(一九九四)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(9) 荒井俊明『鳥屋の獅子舞―一人立三匹獅子舞―』(一九九三)、相模原市教育委員会編『田名の獅子舞』(一九九三)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能　誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)及び筆者調査。

(10) 相模原市教育委員会編『鳥屋の獅子舞』(一九九一)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(11) 小林昌人「菅薬師の獅子舞」『川崎市文化財調査集録』第八集(一九七三)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)、佐保田五郎編著『菅の獅子舞』(菅獅子舞保存会、二〇〇二)および筆者調査。

(12) 小林昌人「初山の獅子舞」『川崎市文化財調査集録』第九集(一九七四)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(13) 山口正道「川崎市小向の獅子舞」『民俗』(一九五五)、小向獅子舞保存委員会編『獅子舞の由来』(一九六九)、小林昌人「小向の獅子舞」『川崎市文化財調査集録』第一八集(一九八二)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(14) 青地竹次「武蔵驚神社の獅子舞」『民俗芸術』一三一(一九三〇)、牛込獅子保存会編『牛込の獅子舞―牛込獅子保存会発足二十五周年記念誌―』(一九九七)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)および筆者調査。

(15) 小林梅次「鉄の獅子舞―横浜市港北区上鉄―」『民俗』第二八号(一九五八)、永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』(一九八七、錦正社)、港北ニュータウン郷土誌編集委員会編『都筑の民俗』(一九八九)および筆者調査。

(16) 前掲書『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』、三三七～三三八頁。

(17) 前掲書『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』、三三八頁。

(18) 畠山　豊「矢部の獅子頭」『平成八年度　相模原文化財年報』(一九九七)一四頁。

(19) 中村亮雄「南河原の雨乞い獅子について」『川崎市文化財調査集録』第九集(一九七四)。

(20) 本田安次『本田安次著作集　日本傳統藝能　第十二巻　風流Ⅲ』(一九九七)錦正社　六一〇頁。

(21) 秋田県教育委員会編『秋田県の民俗芸能』(一九九三)一五三～一五九頁。

(22) 福島県教育委員会編『福島県の民俗芸能』(一九九一)一六六～一六八頁。

(23) 茨城県教育委員会編『茨城の無形民俗文化財』(一九八二)六九～七一頁。同編『茨城県の民俗芸能』(一九九六)一八四頁。

(24) 栃木県教育委員会編『栃木県の民俗芸能』(一九九八)三四～三六頁。

(25) 内田賢作「埼玉の獅子舞と信仰―桶川と三峯の獅子舞から―」『埼玉民俗』第二八号(二〇〇三)一〇～一四頁。

(26) 埼玉県教育委員会編『獅子舞の分布と伝承』(一九八二)一一八～一三一頁。埼玉県立民俗文化センター編『原馬室の獅子舞・棒術』(一九八五)を参照。

(27) 群馬県教育委員会『群馬県の民俗芸能』(一九九七)三五～三七頁。

(28) 田村　勇『房総の祭りと芸能』大河書房(二〇〇四)二九〇～二九一頁。

(29) 中野区教育委員会編『中野区民俗調査第四次報告　江古田・沼袋』(二〇〇四)七三～七九頁。

(30) 本田　安次『本田安次著作集　日本傳統藝能　第十巻』錦正社(一九六六)三～七頁。

(31) 新潟県教育委員会編『新潟県の民俗芸能』(一九九七)七五～七六頁。

(32) 長野県真田町誌編纂委員会編『真田町誌　民俗編』(二〇〇〇)四五四～九頁。

(33) 「三匹獅子舞の分布図」を作成するにあたっては笹原氏の前掲書『三匹獅子舞の分布』、および小島美子「三匹獅子舞のしくみと成り立ち」(一九七七)、新潟県教育委員会編『無形民俗文化財記録第五集　佐渡の小獅子舞』(一九八〇)・『無形民俗文化財記録第六集越後の風流獅子踊り』(一九八一)掲載してある分布図などを参考にした。

(34) 福島県教育委員会編に刊行した『福島県の民俗芸能』(一九九一)および福

島県いわき市教育委員会編『いわきの三匹獅子舞調査報告書』（一九八七）の成果をもとに作成。

(35) 小島の「三匹獅子舞のしくみと成り立ち」に掲載された分布図をもとに作成。

(36) 鹿踊りとは、岩手・宮城両県に分布する風流踊りの系統に属する一人立ちの獅子踊り・獅子舞の一種。名称は鹿の古称である「かのしし」からきている。鹿頭。八頭または十二頭が一組。

(37) 太鼓踊り　太鼓や鞨鼓を打って群舞する民俗芸能の総称。太鼓を伴う踊りは全国的に分布するが、に日本一帯に広く分布する風流系の太鼓を指すことが多い。

(38) 国立歴史民俗博物館所蔵。笹原亮二氏のご教示による。

(39) 中野区立歴史民俗資料館所蔵。

(40) とくに三多摩地域でおこなわれている三匹獅子舞の伝承地に『日本獅子舞来由』が所蔵されている。

(41) 大村達郎「東京都足立区（花畑・鹿浜）の三匹獅子舞―伝承事実把握の試み―」『足立区立郷土博物館紀要』第一七号（一九九五）七四頁。

(42) 東京女子大学民俗調査団編『雄勝役内の民俗』（一九七七）一二一頁。

(43) 福島県教育委員会編『福島県の民俗芸能』（一九九一）一八四頁。

(44) 前掲書『福島県の民俗芸能』、二〇八頁。

(45) 前掲書『福島県の民俗芸能』、一七六頁。

(46) 前掲書『福島県の民俗芸能』、二二七頁。

(47) 豊島区立郷土資料館編『長崎村物語―江戸近郊農村の伝承文化―』（一九九六）三〇頁。豊島区教育委員会編『豊島区長崎獅子舞調査報告』（第一分冊）（一九九一）五三～六七頁を参照。

(48) 前掲書『獅子舞の分布と伝承』　一三一頁。

(49) 前掲書「東京都足立区の三匹獅子舞」　七五頁。

(50) 牛込獅子保存会編『牛込の獅子舞』（一九九七）五三～八二頁および一八六～一八九頁。

【引用文献】

・青森県教育委員会編　一九九六　『青森県の民俗芸能』
・秋田県教育委員会編　一九九三　『秋田県の民俗芸能』
・飯塚　好　一九八四　「獅子舞―基本構造と多様性―」『埼玉県立民俗文化センター研究紀要』創刊号
・いわき市教育委員会編　一九八七　『いわきの三匹獅子舞調査報告書』
・岩手県教育委員会編　一九九七　『岩手県の民俗芸能』
・大村　達郎　一九九七　「三匹獅子舞主要研究文献目録」『民俗芸能研究』第二五号
・大村　達郎　二〇〇一　「三匹獅子舞と行事の変容」『東洋大学大学院紀要』第三四集。
・尾島　利雄　一九七三　『栃木県民俗芸能誌』、錦正社
・菊池　和博　一九九八　「獅子踊の供養的役割と精霊一体化の思想」『山形県地域史研究』第二三号（『庶民信仰と伝承芸能―東北地方にみる民俗文化―』（岩田書院　二〇〇年）に所収）
・倉林　正次　一九七〇　『埼玉県民俗芸能誌』、錦正社
・小島　美子　一九六九　「利根川流域の三匹シシ舞の音楽的系譜」『人類科学』第二一集
・小島　美子　一九七七　「三匹獅子舞のしくみと成り立ち」　吉田智一編『獅子の平野』　国書刊行会
・小島　美子　二〇〇七　「三匹シシ子舞の起源と芸能化の過程について」『季刊東北学』第一二号
・相模原市教育委員会編　一九九六　『三匹獅子舞の諸相』
・笹原　亮二　二〇〇一　「三匹獅子舞の分布」『国立民族学博物館研究報告』第二六巻第二号
・笹原　亮二　二〇〇三　『三匹獅子舞の研究』　思文閣出版
・田村　勇　二〇〇四　『房総の祭りと芸能―南房総のフィールドから―』

大河書房
・栃木県教育委員会編　一九九八　『栃木県の民俗芸能』
・永田　衡吉　一九八七　『神奈川県民俗芸能誌（増補改訂版）』　錦正社
・中村　茂子　二〇〇七　「風流系踊りと三頭シシ踊りの接点―佐渡の小ジシ舞を事例として―」『民俗芸能研究』第四三号
・畠山　豊　二〇〇五　「三匹獅子舞について」　『かながわの三匹獅子舞―獅子頭の世界―』　神奈川県立歴史博物館
・福島県教育委員会編　一九九九　『福島県の民俗芸能』
・古野　清人　一九六二　『獅子の民俗―獅子舞と農耕儀礼―』　岩崎美術社
〔『古野清人著作集第六巻　日本の民俗』（三一書房　一九六八）に増補して所収〕
・本田　安次　一九三〇　「岩代安達郡小浜町の獅子舞」『民俗芸術』第三巻第一号（獅子舞号）
・本田　安次　一九五二　「獅子舞考」『日本民俗学』第五巻第一号
・本田　安次　一九八四　『東京都民俗芸能誌（上巻）』　錦正社
・松戸市立博物館編　一九九四　『千葉県松戸市の三匹獅子舞』
・三隅　治雄　一九五八　「風流」『日本民俗学大系』　第九巻（芸能と娯楽）　平凡社
・柳田　國男　一九三〇　「獅子舞考」『民俗芸術』第三巻第一号（獅子舞号）
・山形県教育委員会編　二〇〇〇　『山形県の民俗芸能』
・山路　興造　一九八六　「三匹獅子舞の成立」『民俗芸能研究』第三号
・山本　修康　一九八六　「埼玉における獅子頭の形態分類についての一試論」　『埼玉県立博物館紀要』第一二号
・桑山　太一　一九七二　『新潟県民俗芸能誌』　錦正社
・埼玉県立民俗文化センター編　一九八二　『下間久里の獅子舞』
・田邉三郎助編　一九八一　『行道面と獅子頭―日本の美術―183―』　至文堂
・西川杏太郎編　一九七一　『舞楽面―日本の美術―62―』　至文堂
・本田　安次　一九六七　『田楽・風流（一）　研究と資料』　錦正社

【参考文献】

・神奈川県立歴史博物館編　二〇〇五　『かながわの三匹獅子舞―獅子頭の世界―』（図録）